

青森県の南東に位置する十和田市は、十和田湖や奥入瀬溪流の玄関口としてよく知られている。この十和田市の南部、奥入瀬川支流後藤川の上流に滝沢地区があり、ここの滝沢鷹太郎家には江戸時代を中心とした文書が約1000点伝来している。

現在では十和田市に寄贈されているが、その中には櫛引八幡宮創建を伝える「中渡正八幡宮縁起」や、滝沢

家が勤めた櫛引八幡宮神事御用関係、滝沢家の系譜・由緒関係、さらには滝沢家の年貢などを含めた知行地関係資料が所蔵されている。

滝沢家文書の中でひときわ注目されるのは、南部氏の糠部（現青森県東ノ岩手県北） 拝領と結びつく櫛引八幡宮の創建に深くかかわる「中渡正八幡宮縁起」である。それには、南部家の守護神たる八幡宮神体を、

滝沢氏が甲州から運んで滝沢の地に中渡八幡宮を建立したこと、それが、やがて「瑞夢」を感じて鳩の導きによって八戸市櫛引に移して櫛引八幡宮を創建したという故事が記されている。

縁起には、甲州からや櫛引への遷座の年代は記されていない。しかし、年代の記述がないことが、かつて伝承の古さを語っている。

甲州（現山梨県）から八幡宮神体を糠部南部の地に将来したことにより、櫛引八幡宮は盛岡南部家の総鎮守として1030石余の社

と記すほどであった。滝沢家はこの大鎧の補修管理にも当然携わっており、時には赤糸緘大鎧の袖や草摺の札をつなぐ緘し糸が知人から所望されることがあった。滝沢家文書の中に、三戸代官が内々に鎧の糸をお守りにしたいとして、「少々そうと少々いた

に成されたく」という依頼の手紙が見えている。さらに八幡宮の祭神は武運長久の軍神であり、しかも鎧糸の赤色は古来より魔除けや疫病を防ぐ色として信じられていた。近時では、太平洋戦争が勃発すると、出征する近隣の兵士たちが弾よけのお守りとして鎧糸を分けてもらうことが多かったといわれている。

現在、滝沢家には「櫛引八幡御具足糸切レ」「御鎧の糸」と書かれた包み紙が残されている。この中には赤色の糸が大事に包み込まれており、これは同家に江戸時代以来伝わってきた鎧糸である。

## 櫛引八幡宮の由来と

### 赤糸緘大鎧の糸

### 滝沢家文書が語るもの

三浦 忠司

（元県史編さん専門委員・八戸歴史研究会会長）

領を獲得し、江戸時代を通じて盛岡藩から篤く崇敬を受けることになった。

この所伝を裏付けるのが滝沢家に伝わる縁起である。作成年代は1715（正徳5）年とあるから、南部光行の糠部拝領が盛岡南部家の家系図にしっかりと定着する以前の、江戸時代前半期頃の南部氏草創の伝承を色濃く伝えるものであ

が最初に執り行うのが慣わしであった。

櫛引八幡宮には国宝の赤糸緘大鎧と白糸緘大鎧が所蔵されているが、この鎧は江戸時代から有名であった。全国に派遣される幕府巡見使に随行した古川古松軒は、「江戸を出でしより当八幡宮の宝物第一にて、余にめずらしき物を一見せしことなりし」（東遊雑記）



櫛引八幡宮の赤糸緘大鎧（同神社写真提供『県史通史編1』掲載）